

学位請求論文審査報告要旨

2018年7月11日

申請者 孫 璋

論文題目 『万葉集』と中国古典文学との比較研究
—詠物の表現を中心に—

論文審査委員 河添房江
鉄野昌弘
松原 真

1. 本論文の内容と構成

本論文は、「『万葉集』と中国古典文学との比較研究——詠物の表現を中心に」と題して、『万葉集』における花鳥の歌について、漢詩の詠物詩と比較検討した上で、それとは異なる恋情との結びつきの独自性を究明するものである。

『万葉集』の花鳥の歌について、先行研究では中国文学との関連から少なからず論じられてきた。特に六朝時代の詠物詩からの影響については、しばしば指摘されるところである。しかし詠物詩の受容がいわれる一方で、詠物詩の花鳥の表現史を突き詰めて分析した上で比較する研究はほとんどなかったといえる。さらに『万葉集』の花鳥の歌における恋情との結びつきについても、個々の表現に関する指摘はあったにせよ、それらを体系的、総合的に把握する試みがなされてこなかった。

そうした現状を乗り越えるべく、本論文は、『万葉集』における「梅」「鶯」「ホトトギス」「黄葉」「雁」「萩」を分析の中心に据えることで、中国漢詩の影響を受けつつも、それとは異なった万葉固有の花鳥の詠まれ方の位相を明らかにするものである。

本論文の構成は、二部構成である。第一部では、初唐までの漢詩における「梅」「鶯」「雁」の用例を年代順に分析し、その表現史の展開を細かく確認した。第二部では、第一部を踏まえながら、「梅」「鶯」「雁」に加えて「ホトトギス」「黄葉」「萩」の歌における恋情との結びつきについて考察を行った。特に花鳥の歌で恋情を表す個々の表現の型を抽出することに重点をおいた。第五章では、漢詩における花鳥の取り合わせと比較した上で、『万葉集』における動植物と妻恋という独自の結びつきを考察し、『日本書紀』『風土記』の世界までその発想の基盤を掘り下げて論じた。

本論文の目次は以下の通りである。

序章 本研究の意義及び『万葉集』における中国古典文学受容の研究史
第一節 『万葉集』と中国古典文学

第二節 先行研究及び本研究の位置付け

第三節 研究目的及び研究方法

第一部 漢詩における「花鳥」の展開—先秦・漢・魏晋南北朝・隋・初唐を中心に—

第一章 漢詩に詠まれた「梅」

第一節 先秦時代の詩文に詠まれた「梅」

第二節 魏・漢・晋の時代に詠まれた「梅」

第三節 宋・齊の時代に詠まれた「梅」

第四節 梁の時代に詠まれた「梅」

第五節 北周・陳・隋の詩に詠まれた「梅」

第二章 漢詩に詠まれた「鶯」

第一節 『毛詩』に詠まれた「鶯」

第二節 漢・魏・晋の詩文詠まれた「鶯」

第三節 宋・齊の詩文に詠まれた「鶯」

第四節 梁の詩文に詠まれた「鶯」

第五節 陳・北朝・隋の詩文に詠まれた「鶯」

第六節 初唐詩に詠まれた「鶯」

第三章 漢詩に詠まれた「雁」

第一節 先秦時代の作品に詠まれた「雁」

第二節 『毛詩』『楚辞』に詠まれた「雁」

第三節 漢・魏・晋の詩文に詠まれた「雁」

第四節 宋・齊の詩文に詠まれた「雁」

第五節 梁の詩文に詠まれた「雁」

第六節 陳・隋・初唐の詩文に詠まれた「雁」

第二部 『万葉集』における「花鳥」の展開

第一章 「梅花歌三十二首」における「梅」と「鶯」の再考

第一節 「梅・鶯」に関する研究史及び本研究の位置づけ

第二節 序文の「落梅之篇」について

第三節 「梅花歌三十二首」における「梅」と「鶯」

第二章 ホトトギスと花との取り合わせにおける恋情との結びつき

第一節 高橋虫麻呂歌集の一首について

第二節 堅魚歌をめぐる諸注釈について

第三節 堅魚歌における「共とも」について

第四節 堅魚歌におけるホトトギスと卵の花

第五節 旅人歌における「片恋」

第三章 『万葉集』の「モミチ」の一考察—天平十年の橘奈良麻呂宴歌に中心とし

て—

第一節 天平十年の橘奈良麻呂宴

第二節 「散ル」について

第三節 「手折ル（折ル）」「カザス」について

第四節 「惜シ」について

第五節 漢詩の「黄葉」と『万葉集』の「モミチ」

第六節 「ニホフ」について

第四章 「雁」の歌における恋情との結びつき

第一節 「雁が音寒シ」に関する研究史及び問題点

第二節 「雁」の歌における「寒シ」についての再検討

第三節 「雁が音」と恋情との結びつき

第四節 歌における「雁」と「萩」との取り合わせ

第五節 歌における「雁」と「黄葉」との取り合わせ

第五章 『万葉集』における「花鳥」と恋情との結びつき

第一節 漢詩における花鳥の取り合わせ

第二節 『万葉集』における花鳥の世界

第三節 『万葉集』における「雄鹿」と「秋萩」との取り合わせ

第四節 動物と鳥の歌における恋情

終章 各章のまとめ及び今後の展望

初出一覧

資料編

2. 本論文の概要

本論文は、第一部の「漢詩における「花鳥」の展開」、第二部の「『万葉集』における「花鳥」の展開」という二部構成から成っている。

序では、『万葉集』と中国古典文学についての研究史及びその意義、続いて花鳥歌の研究史と問題点に言及している。

第一部は、漢詩における「梅」「鶯」「杜鵑」「雁」「黄葉」の展開について論じたもので、対象となるのは、先秦時代から六朝を経て初唐までの漢詩である。

第一章は、中国漢詩における「梅」を中心に考察した。六朝に始まり、梁以降に隆盛になり、陳を経て初唐に入ると、詠みぶりがより細緻になっていくという「梅」の詩の流れを明らかにする一方、「梅花詩」が「詠物詩」の展開と軌を一にすること、「閨怨詩」「辺塞詩」「侍宴詩」の展開と相まって発展してきたことを論じている。

第二章では、「鶯」の表現史を考察した。漢詩における「鶯」は鳴き声が人々に賞美される一方、春の花と共に美的に捉えられ、美しい花鳥の世界を紡ぎ出している。詠

物詩の展開とともに、「鶯」の詠みぶりの展開を確認している。

第三章では、「雁」の表現史を考察している。「梅」「鶯」が六朝に入ってから詠まれていくのとは異なり、「雁」の詩において主流となる悲秋との結びつきは、宋玉の「九辯」から始まった。魏晋になって、「雁」は悲秋との結びつきのほか、悲しみを増すもの、望郷の思いを募らせるもの、辺塞を表すものとして定着した。一方、景として賞美された「雁」も晋以降の詩文に現れている。陳の時代になると、「雁」は「悲秋」の思いを募らせる一方、秋の美を代表する景としても捉えられていることを確認している。

第二部では、第一部で考察した漢詩の表現史を踏まえた上で、『万葉集』における梅と鶯、ホトトギスと卯の花・花橘、雁と萩・黄葉との取り合わせにおける恋情との結びつきを考察している。

第一章では、まず巻五の天平二年の「梅花歌三十二首」の序文における「落梅之篇」について検討している。漢詩における「落梅」という言葉が特に楽府「梅花落」を指すことを踏まえて、「落梅之篇」という表現は漢詩の楽府「梅花落」を指す可能性が高いことを前提として述べ、歌に詠まれている具体的な表現が楽府「梅花落」以外の漢詩からも摂取したことを踏まえて、「梅花歌三十二首」は「梅」の漢詩を一般的に受容したものである、と論じている。

続けて、「梅花歌三十二首」を中心に、梅と鶯との取り合わせを考察し、鶯が梅の花の散ることを「惜しむ」(五・八二四、八四五)、梅の花が鶯を「なつ」こうとする(同・八三七)、梅が鶯の鳴き声を聞くと花を咲かせる、また鶯の鳴き声を待ちかねながらも花を散らさない(同・八四五)、など歌の表現により、鶯と梅の間に愛し合う恋人の関係が擬されたことを確認している。特に「惜しむ」という表現は第三章でも考察したように、花鳥の歌で共通する表現として頻繁に詠まれている。

第二章では、神亀五年の堅魚歌(八・一四七二)と旅人歌(同・一四七三)に詠み込まれているほととぎすと卯の花・花橘を考察した。堅魚歌と旅人歌の先蹤として考えられるのは、高橋虫麻呂の「詠_二霍公鳥_一」(九・一七五五、一七五六)であるが、ほととぎすと花の間にあからさまに恋愛関係を擬したのは、堅魚・旅人歌を待たなければならない。堅魚歌は、ほととぎすを卯の花の「トモ」と捉え、両者が常に相伴う関係を示している。一方、旅人歌は、卯の花を離れ、人里の散ってしまった花橘を用いて和し、花橘を「片恋」しつつ鳴くほととぎすを造型している。亡妻経験という特殊な背景のもとで詠んだが、ほととぎすと花橘を夫婦と規定する点に注目している。天平期に入って、ほととぎすと花が主に賞美される景物となっていく一方、花鳥が能動的に行動するように詠まれていく様相は、虫麻呂歌、さらに堅魚・旅人歌から受け継がれたものと考察している。

第三章では、天平十年の「橘奈良麻呂宴歌」(八・一五八一～一五九一)を中心に、『万葉集』における「黄葉」について考察した。漢詩と同様に秋の寂寥感をもたらす

例も見られる一方、『万葉集』における「黄葉」は春の「花」と一緒に秋の景として賞美されてもいる。「橘奈良麻呂宴歌」における「惜シ」「手折ル」「カザス」「ニホハス」などの表現を考察することにより、『万葉集』における「黄葉」が花のように眺め愛でられていることを明らかにしつつ、橘奈良麻呂の宴に詠まれた「黄葉」が辺り一面を照らすほど美しいものであることも推測できる。この結論を踏まえて、『万葉集』における「雁」と「黄葉」との取り合わせも広い意味での花鳥歌として捉えている。

第四章では、ホトトギスの歌にすでに現れていた花鳥と恋情との結びつきを読み取り、さらに「梅花宴」以降、花鳥の取り合わせが盛んになる趨勢において、雁と萩、雁と黄葉にも恋情と結びついて詠まれた歌が現れたことを論じている。

雁と萩の場合は、結婚する意味の「逢ふ」で両者の婚姻関係を示したり（十・二一・二六・秋雑歌）、雁を待ってその鳴き声を合図に花を咲かせるという構図を採用したり（同・二二七六・秋相聞）、よそに行く「雁」を「留」めようとする「秋萩」を詠んだりするような姿勢から、両者の間に広く存在する「恋」が読み取れる。一方、「雁」と「黄葉」の場合は、両者の継起並存することを示す「ナへ」（八・一五四〇・聖武天皇）、及び「雁」の歌における「寒し」が恋人の不在によってもたらされた孤独感を持つことを合わせて考えると、「雁」の鳴き声から植物が寒々と感じて色づく、すなわち両者を恋人のように捉えることも可能である。以上の考察で、梅と鶯、ホトトギスと花橘・卯の花、雁と萩・黄葉に、それぞれ恋情を表す表現や度合いが異なりつつも、詩的表現よりも花鳥が慕い合う世界を髣髴とさせることを明らかにしている。

第五章では、漢詩における花鳥の結びつき、及び『日本書紀』『風土記』などの上代文学に目を向けつつ、『万葉集』における動植物とそこに擬された恋愛関係が、独自の発想であることを考察している。

まず、漢詩における花鳥の組み合わせを分析して、「待」「留」「恋」「相依」などの表現により、花鳥の間に恋愛関係が確認できるのも確かに存在しているものの、詩的表現としての花鳥の取り合わせが、主に春の美景として描かれたり「思春」の気持ちを募らせたりし、梅と鶯など春という季節感と緊密に関わっていることを明らかにしている。

また、漢詩における花鳥と比較すれば、花鳥の歌における恋情との結びつきは、詩的表現の摂取を前提にしつつも、意識的に花鳥の恋情を描こうとする姿勢や、花が鳥の訪れを待っているという世界の構築が、『万葉集』独自のものであるという結論に至っている。このように、『万葉集』における花鳥は、漢詩から受容しつつ、花鳥の慕い合う世界を形成しているのである。

さらに、花鳥の歌に先立つ「鹿」と「萩」との取り合わせから、その発想の源を検討した。漢籍にも『万葉集』にも動物の恋情を詠んでいるものが見られるが、『万葉集』においては動物の「妻恋」へ多大な関心を寄せる点に特徴があることを指摘している。

その結果、花鳥の間に詠み込まれている恋情との結びつきは、漢詩の表現や方法を受容したことが前提にありつつも、動物が妻を求めようとする『万葉集』にも古くから見られる発想を受け継いだ結果であることが明らかになった。古くからある発想とは、『万葉集』においては第二期の「雄鹿」と「秋萩」との取り合わせに見られ、さらに『日本書紀』『風土記』がその発想の源である点まで論じている。

3. 本論文の成果と問題点

本論文の成果は、さほど注目されていなかった六朝から初唐時代の詠物詩の花鳥に注目し、『万葉集』の受容において、類似点を指摘しがちな先行研究に対して、いかに日本的な変容を遂げているかを体系的に明らかにした点といえる。詠物詩や『万葉集』の用例一つ一つを疎かにせず、丹念に調査し、それを意味づけることで先行研究を乗り越えようとしたことは高く評価される。

その成果は具体的には以下の三点にまとめられる。

第一に中国からの留学生の強みを活かして、先秦時代から初唐までの「梅」「鶯」「雁」の具体的な変遷を、多くの例を博搜しながら、訓点まで施して、じつに精緻に分析したことである。「梅」と「鶯」が六朝以降に細緻かつ多彩に詠まれて展開していくこと、さらに「雁」が六朝以前にすでに悲秋の詠み方が定着していたという対比とその後の多様な展開を明らかにしたことは注目される。漢詩の表現史を花鳥の詠物詩という観点から整理しなおした、百頁近いその分析はまさに労作であり、『万葉集』における受容がどの時点の表現の撰取であるかを考察する際にも、有効な論拠を与えるものとなった。また目立った先行研究のない成果だけに、これらを活字化ないし電子化・公開すれば、他の研究者に資するところも大であろう。

第二に、花鳥の詠物詩と比較することで、『万葉集』において梅と鶯、ホトトギスと花橘、雁と秋萩・黄葉が、いかに恋情と強く結びついて詠まれていたかを明確にした点である。詠物詩の春の恋情の影響を受けつつも、『万葉集』の花鳥の歌が、春・夏・秋と季節を広げて発展したのかを、先行研究も十分踏まえつつ考察することにより、花鳥の歌を貫く恋情の論理を体系的に示しえたのは、本論文の大きな功績である。

第三に、『万葉集』第三期以降の花鳥の歌における恋情との結びつきは、遡れば、第二期に『人麻呂歌集』で詠まれた牡鹿から秋萩への「妻恋」、さらには『日本書紀』『風土記』の記事に現れた牡鹿の妻への関心が、その発想の源として捉えられるという新見を提示したことである。漢詩から多大な影響を受けたと指摘されてきた花鳥の取り合わせにも、『万葉集』から『日本書紀』『風土記』に遡る動物の妻恋に発想の基盤があり、それが日本固有の発想である点まで提言したことは高く評価される。

このように優れた面を備えた本論文であるが、問題点もいくつか存在する。

第一に、第一部の詠物詩の分析と、第二部の『万葉集』の分析がそれぞれ精緻であっても、その繋がりが曖昧になっている点が見受けられた点である。第一部と第二部の分析の有機的な繋がりをもっと明確に書き込む必要があったのではないか。

第二に、万葉歌が漢詩といかに異なる花鳥の世界を紡ぎ出すかについて、詳細な考察があっても、なぜそうなるのか、その根拠について多くが書かれているわけではない。動物の妻恋を挙げるが、その以外の要素はないのか、またその用例も鹿の妻恋以外にないのか、といった疑問が残る。

第三に、そこからさらに歌と漢詩との差異が構成される根本的な理由、すなわち中国的な心性と、日本的な心性の相違の問題がまだ十分に掘り下げられないという憾みも残る。記紀歌謡まで遡って、志を述べる漢詩と相聞を軸に発達した和歌との本質的な差異や、自然観の相違など、もっと多角的な視野から考察を深めるべきであろう。

しかし、こうした問題点は、本論文がもたらした学術的成果の価値を抜本的に損なうものではない。また個々の問題点については、孫氏にも十分な自覚があり、口述審査時の適切な応答に鑑みて、今後の研鑽により考察を深めて克服されることが期待される。

4. 結論

以上のことから、本論文が学位論文に値する優れた研究であることを認め、孫瑋氏に一橋大学博士（学術）の学位を授与することが適当であると考えます。

最終試験結果要旨

2018年7月11日

申請者 孫 瑋

論文題目 『万葉集』と中国古典文学との比較研究—詠物の表現を中心に—

論文審査委員 河添房江 鉄野昌弘 松原真

2018年6月28日、学位請求論文提出者 孫瑋氏の論文および関連分野について、本学学位規定第8条第1項に定められた最終試験を実施した。

試験において、提出論文「『万葉集』と中国古典文学との比較研究—詠物の表現を中心に—」に関する問題点及び関連分野について質疑を行い、説明を求めたのに対して、孫瑋氏は適切な説明を以て応えた。

よって審査員一同は、孫瑋氏が学位を授与されるに必要な研究業績及び学力を有すると認定し、最終試験の合格を判定した。